推

令和８年度
鹿児島大学法文学部法経社会学科
地域社会コース・経済コース
学校推薦型選抜Ⅱ
「小論文」問題冊子

注意事項

１．試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないこと。

２．この表紙の下には、問題用紙８ページ　があります。

３．問題冊子とは別に、解答用紙２枚、下書き用紙１枚　が配付されています。

４．「解答はじめ」の合図があったら、問題冊子、解答用紙、下書き用紙の枚数や種類に間違いがないか確認しなさい。

５．試験中、問題冊子や解答用紙の乱丁、落丁、印刷不鮮明、汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。

６．解答は、解答用紙に「横書き」で記入すること。

７．試験終了後、解答用紙以外はすべて持ち帰ること。

２ページ以下の課題文を読んで、次の設問に答えなさい。

問１　課題文を要約しなさい。

（400 字以上 600 字以内）

問２　下線部“「わからないことはなくならない」という出発点に立つほうが、よりよい社会認識が期待できる”のはなぜか。本文の内容を踏まえ、あなた自身の具体的な経験を交えながら、あなたの考えを述べなさい。

（400 字以上 600 字以内）

私たちは、当たり前ですが、世の中についていろんなことを知っていますし、生活する上で知っていることから大きな影響を受けます。たとえば「どうすればほんとうにダイエットできるのか」という知識（情報）には、多くの人が関心を持っています。実際にその知識に従って行動する人もいるはずです。

このことは、社会を動かす力を持っているリーダーたち、たとえば政治家や経済界のトップの人たちにもあてはまります。リーダーたちは、自分たちが持っている知識、つまり社会の認識に則って組織を、そして社会を動かしていきます。一般の人でもリーダーたちでも、知識は取るべき選択や行動方針に強く影響します。

しかし強調したいのは、むしろ「知らないこと」の影響です。そう、私たちの生活は「知らないこと」「知らなかったこと」にも大きく影響されています。いや、むしろ私たちは、「知っていること」に影響されるよりも、ずっと大きな影響を「知らないこと」「意図していなかったこと」、さらには「予想外の出来事」によっても絶えず受けているともいえるのです。この「知らないこと」のせいで、社会は私たちが意図したとおりに動かないですし、意図したとおりに動いたとしても思いも寄らない副作用に見舞われたりします。さらに、私たちが「知らないこと」に取り囲まれているということを無視してしまうと、もっとひどい結果になってしまうこともあります。

一つ例をあげましょう。現在、日本は少子高齢化の問題に悩まされています。出生率は、当初思ったよりもずっと低くなりました。研究者は、なぜ出生率の低下が引き起こされたのかについていろんな研究を蓄積してきました。女性が働くようになったからではないか、若者がうまく仕事につけなくなってしまったからではないか、などです。

その膨大な研究の中に、ただ一つとして存在しない問いがあります。それは、「出生率の低下を引き起こしたのは誰か」という問いです。もう少しいうと、研究者の中には、日本で（少なくとも 1970 年代以降の）出生率の低下を明確な意図をもって引き起こそうとした人がいて、その人のせいで少子化になったのだ、と考えている研究者は、一人もいません。

実は、私たちの世界の数多くの問題は、誰かが意図的に引き起こしたから生じたものではありません。もちろん、起こってしまった問題を解決することに積極的ではな

かった人はいるでしょう。日本の低出生率は1970年代からすでに50年間近く続いていますが、少なくとも1980年代までは日本国民は概して少子化の問題を明確に認識していませんでしたし、ほとんど政治的課題にものぼりませんでした。しかしこのことは、「政治家が（意図的に）少子化を引き起こした」ということではありません。

そもそも、もし誰か悪意を持っている人がいて、その人が問題を引き起こしているのなら、これほど解決しやすい問題はありません。実際には、深刻な問題は「意図されていない」うちに発生して進行しますし、その背後には非常に複雑な要因が絡み合っています。そして私たちは、研究者を含めて、この絡み合いについて実はほとんど理解できていないのです。

もうひとつ、私たちが暮らす社会について、伝えておきたい特徴があります。それは、社会を構成するさまざまな要素は、きちんとしたかたちでつながっているわけではない、ということです。別の言い方をすれば、つながりが「緩い」のです。さらに、社会についての個々の規則や制度、その背後にある理論・理屈も、かなりの緩さを含んでいます。

例を挙げましょう。この世にはたくさんの「仕事」がありますね。セールスの仕事もあれば、食品加工の仕事もあれば、経理の仕事もあります。日本の社会学は独自に「職業」を分類するシステムを構築していますが、これによれば、職業は700個程度に分類されています。同じ職業でも細かくみれば異なった仕事をしていることがありますから、仕事の数というのはそれこそ無数にあると言っても良いくらいです。

なぜたくさんの仕事があるのかといえば、その一つの理由は「分業」にあります。たとえばスマートフォンがほしいとき、一人の人がそれを最初から作り上げることは不可能でしょうし、できたとしても非常に効率が悪いです。実際には、材料を作る人、そこから部品を作る人、組み立てをする人、デザインや設計をする人、販売する人、広告する人、そういった人たちをまとめて管理する人（会社の経営者）、会社に出資する人（株主）など、実に様々な人が「スマートフォン」の製造・販売に携わっています。この協力体制が発達することで、私たちの世界は格段に豊かになってきました。

他方で、スマートフォンの製造・販売によって得られた豊かさ（利益、会社や社会

全体で儲かったお金）を、それに携わった人に分配する際には、独特の問題が生じます。「分配」というのは、儲かったお金を、仕事をしてくれた人たちに配ることです。

話を簡単にするために、一つの小さな会社について考えましょう。その会社はスマートフォンの小さな部品を作っています。会社には、部品を加工・製造する人、部品を売り込むために営業する人、会社のお金の管理（経理）をする人、合計3人がいます。部品が思いのほかよく売れたので、昨年1年間で2,000万円の余剰金、つまり部品を製造するためのコストを除いた上で儲かったお金が生まれました。このなかから、会社で将来のためにとっておくお金や借金の支払いのためのお金を除いた上で報酬を分け合うのですが、その際の基準を決めることはかなり難しいでしょう。3人とも会社の運営に必要な、重要な仕事をしているという自負はあります。しかし報酬は個別に、何らかの分配方法を決めて支払うしかありません。

そこで会社は、年功や資格といったいろんな基準で給与を決めます。「AさんはBさんより5年も長く勤めているから、Aさんには多めに支給しよう」とか、「BさんはCさんが持っていない資格を持っているから、Bさんには多めに支給しよう」とか、そういう判断をするわけです。しかしほんとうにこれらの基準が適正かといえば、そんな保証はありません。「よくわからない」というのが実態です。しかし、この「よくわからない」規則やシステムは社会に広く行き渡っていて、みんなそれに従っているのです。

ここで強調しておきたいのが、「協業」（一緒に協力して仕事をすること）のシステムと、それによって生み出された利益の「分配」システムが、意外なほど緩いかたちでしかつながっていない、ということです。「この仕事は利益の何%にあたる」といった明確な対応規則があった上で分配がなされているわけではありません。実は、利益を分配する基準は、緩々（ゆるゆる）です。

「お金に関係するのにそんなに緩々でいいのか」と思う人もいるかもしれませんが、実は世の中そんなものなのです。

最初の話題に戻ります。「私たちは、よく知らないことに動かされている」というお話です。これはどういうことなのでしょうか？

ここでは、私たちが住む現代社会の特徴についてお話しします。この特徴のせいで、

私たちは社会のことについてうまく理解できなかったり、予測できなかったりするのです。

この特徴は、私たちが「専門知識」や「専門的な仕組み」に取り囲まれている、ということです。

特に近代化以降、専門知識はさまざまに枝分かれし、その中でどんどん高度化してきました。そしてその知識を反映した専門的な仕組み・システムも高度な発達を遂げ、その一部は私たちの生活の土台になっています。もはや一般の人は、その中身についてちゃんと理解することはできません。

〔中略〕

会社経営で必須となる会計システムもそうでしょう。現代の会社経営は、会計という専門知によって支えられています。つまり会計は私たちの生活全体を支えるインフラであるといってもよいでしょう。しかしいったいどれくらいの人が、現代会計の基礎となる複式簿記の考え方をきちんと理解しているでしょうか。社長さえも理解していないケースがたくさんありそうです。ですから、詳細を一人ひとりが理解するより、信頼できる専門家を置くことのほうが重要だ、とみんな考えているはずです。

医療についての専門知識も同じです。現代の医療は極めて高度化した専門知識と技術によって運営されています。遺伝医学、ゲノム製薬、種々の疫学研究などに高度にに専門分化されていて、各分野で無数の論文が発表され、多額の資金を費やす開発研究がなされています。専門家でさえその全容を把握することはできません。

もっと身近な制度についても同様です。たとえば私たちのどれくらいが、育児休業制度についてきちんと理解しているでしょうか。取得できる条件は？　取得期間は？　休業中の報酬は？　はっきりと答えられる人はごく少数でしょう。2019年時点で、育児休業中の給与は実質9割ほど戻ってくるということを知っている人は何割いるでしょうか。

このように、私たちの身近な制度についても、専門的すぎて理解できないことはたくさんあるのです。書店に行けば、これらの問題について「やさしく」解説した、という触れ込みの本をたくさん目にすることができます。ただ、ある問題についてある

程度でも理解したいと考えたとき、そのために書籍をまるごと一冊読まなければならないと考えると、憂鬱(ゆううつ)にならないでしょうか。一冊でさえ、読破する前に途中で諦めてしまうことも多々あるでしょう。私の本棚にも、途中までしか読めなかった「入門書」がたくさん並んでいます。

しかしこれだけだと、「でも専門家は知っているのだから、わかりやすく要点だけを教えてもらえばいいのでは」と感じる人もいるでしょう。ただ、問題はたくさん残っています。当たり前ですが、わかりやすく教えてもらったからといって、専門家と同等の知識が得られるわけではない、ということです。入門書だけで専門家になれるのだったら、どんなに楽なことでしょうか。しかし世の中そんなに甘くありません。

さらに、専門家がほんとうに信頼できるのか、という問題もあります。なにしろ「知っている」のは向こうです。自分が聞かされた知識がほんとうなのかどうかは、悲しいことに、確かめようがありません。ある医者の診断が信用できないというときに、私たちができるのは、医学を一から勉強することではなく、別の専門家（医者）の意見を聞くことです。いわゆる「セカンド・オピニオン」ですね。

当然ですが、専門知識はどんどん高度化していきます。そうすると、上記のような問題はますます増えていくでしょう。残念なことに、実は私たちが住むこの世の中は、専門知識を勉強すればどんどんよくわかるというふうにはできていません。むしろ専門的な学問が発達すればするほど、世の中はどんどん複雑になり、全体的に「よくわからないもの」になるのです。

しばしば私たちは、「わからないことは専門家に聞け」といいます。それ自体はもちろん正しい姿勢でしょう。ただ、このことは必ずしも、専門家の存在によって、この社会から「わからないこと」が減っていくということを意味していません。むしろ専門知とそれを活かした社会の制度づくりによって、一般の人には「わからないこと」はどんどん増えていくのです。

現代の社会学では、以下のことを強調します。知識は、対象についての知識であるのと同時に（あるいはそれ以前に）、対象を形作るものである、ということです。この相互的な関係を、対象と知識の間の「再帰的(さいきてき)な関係」といいます。「再帰性」という概

念はあまり聞き慣れないかもしれませんが、相互に影響を与えあっていて、一方が変われば他方も変わる、くらいの意味だと理解しておいてください。

専門知も対象と再帰的な関係を持っていますが、独特の特徴もあります。専門知は、対象をよりよく理解するために、複雑なものになりがちです。この複雑な専門知が今度は対象を形作るのですから、再帰性が進むと、専門知のみならず対象自体がどんどん複雑になっていくのです。

〔中略〕

個々の専門知・専門システムは、たいていは世の中をより便利にしよう、より適正にしよう、そしてより楽しくしようという目的で作られます。日本でも多くの家庭では自動車を保有していますが、安心して自動車に乗れるように考えられた仕組みが自動車保険です。しかしその契約の詳細や査定の仕組みについては、もはや素人は容易に理解できません。損害保険の取り扱いに必要な資格は、うまく行けば 1〜2 ヵ月の勉強でも取得できますが、保険の知識が複雑であることに変わりはありません。複雑な仕組みを導入することで、たしかに私たちの生活の安心はある程度確保できます。他方で、こうした知識に基づいた制度が私たちの生活環境を形作り、私たちは結果的に「よくわからない」ものに取り囲まれることになるのです。

〔中略〕

経済の仕組みも、社会保障制度も、人間が作ったものです。私たちは、私たち自身が作り上げた、よくわからない環境のなかにどっぷり漬かって生活しています。また、「自然」についてはよくわかっていても、それが社会に与える影響は社会の作り方によって変わってきますから、やはり予測不可能なことは残るのです。

このことは重要なので、強調しておきましょう。人間とは、自分たちで作り上げた、なんだかよくわからない環境のなかで生活する存在なのです。そしてこのことは、複雑で、すぐに変化してしまう現代社会において特によくあてはまります。

「そんなの、社会科学者の怠慢か、あるいは社会科学の未発達のせいじゃないのか」

と言いたくなる人もいるでしょう。たしかに、そういう説明が全く成り立たないというわけではないかもしれません。ありていにいえば、人間社会とはそもそも「わからない」ものだ、ということです。そしてそのわからなさ具合は、どんどん加速している可能性さえあるのです。重要なことは、「社会のことについてはわからないことだらけ」というのは説明の放棄などではなく、社会を理解することの出発点の確認だ、ということです。「突き詰めればすべて説明できるはずだ」という出発点に立つよりは、「わからないことはなくならない」という出発点に立つほうが、よりよい社会認識が期待できるのです。

〔出典〕　筒井淳也『社会を知るためには』筑摩書房、2020年による。ただし、問題作成のため、原文の一部を改変している。